

2019 年 3 月 10 日（日）「教会の教師とは」

マタイ 23:1-12

1 そのとき、イエスは群衆と弟子たちに話をして、2 こう言われた。「律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい。けれども、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。4 また、彼らは重い荷をくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。5 彼らのしていることはみな、人に見せるためです。経札の幅を広くしたり、衣のふさを長くしたりするのもそうです。6 また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、7 広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです。

8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。9 あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。10 また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。11 あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

【序論】

今日から 23 章に入ります。何度かお伝えしてきていますように、マタイ福音書は 5 つの主イエスの教え（説教）を軸に構成されています（5～7 章、10 章、13 章、18 章、23～25 章）。つまり、ここから第 5 の教えを学んでいくことになります。23 章全体では律法学者・パリサイ人の偽善を暴く激しい主の言葉が語られています。特に、次回から扱う 13 節以下では「わざわいだ」という宣言が 7 回（14 節を含めると 8 回）も繰り返されている。これは山上の説教の中の 8 つの祝福（幸いなるかな）と見事な対照になっています。主イエスが^{とかく}兎角お嫌いになるのは宗教的偽善であり、それは「幸い」の対極にあるということが分かるでしょう。

ところで、今日の箇所の後半では「先生と呼ばれてはいけない」という内容が出てきます。これはそのまま読むと、すべての教職者の存在を否定し、その立場にある者を震撼させる言葉となるでしょう。実際、私が教会音楽を習った I 先生は、時々冗談交じりに「私を先生と呼ばないでください」とおっしゃっていました。ただ、生徒の立場からすると、とても「I さん」と呼ぶことはできませんでした。この教えの意味も含め、主イエスが真に言わんとしていることを読み解いてまいりましょう。

【本論】

本論 1. 律法学者・パリサイ人の教え

そのとき、イエスは群衆と弟子たちに話をして、こう言われた。「律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい。けれども、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。(23:1-3)

ここで律法学者とパリサイ人について言及されるのは、22章で彼らがたびたび主イエスに議論を吹っかけてきたからでしょう。時間的に「すぐ」ではなかったかも知れませんが、主は「**群衆と弟子たち**」に向けて、彼らの言行の不一致を明らかにされました。

「**モーセの座**」というのは、モーセ律法を教える権威が与えられた人々、律法を解釈・適用する資格を公的に認められた人々のことです。聖書知識は豊富であり、実際に会堂の演壇に備えられた石の座で聖書朗読をすることもありました。また、彼らは一面「法学者」として弁護士のような役割も担ってましたのです。家同士のトラブルが勃発したときには、彼らの出番となる。律法の細則に基づいて「こういう場合はこうすればよい」と適宜教えてくれる、頼りになる存在でした。私たちもトラブルに巻き込まれた時には弁護士に相談することがありますが、一般庶民にとってはそういう存在だったのです。

主イエスは彼らの言うことはすべて守り行なえと言われます。ここにはやや皮肉が込められており、「もし行ないたければ行なえばよい」というニュアンスで言われているようです。主イエスの行動を見るならば、決して律法学者の言うことを逐一守ってはいないのです。主は、安息日にも麦畑で穂を摘むことを弟子たちに認め(12:1-8)、ご自身は癒しを行ない(12:9-14)、食前の浄めの儀式も意図して行ないませんでした(15:1-11)。主イエスの律法に対する態度を整理しておかなくてはなりません。主は、律法の心を行なうこと(神がその律法を通して真に人に求めておられること／神と人を愛すること)は徹底して守るように教えました、その教えの表面だけを行なって満足する態度には断固として反対されました。それは実行したことにはならないと。

私たちの生活におきまして、日々回している日課があると思います。もう何も考えなくてもできるように習慣化することは大切である反面、いつしか心がこもらなくなり、体だけが動いているということが起こり得ます。そういう「聖書通読」「祈り」「奉仕」を主が退けられるのであれば、私たちは気をつけなくてはなりません。私が一週間の間に絶対にやらなくてはならない仕事は、祈ることはもちろんですが、具体的には週報作成、礼拝用のパワーポイント作成、説教準備であり、その他様々な周辺の仕事をこなす

ながらどうにか日曜日を迎えます。それらが「ただこなしている」だけの状態になるのが怖いのです。

また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。(23:4)

実際には聖書に書いていない煩瑣^{はんさ}な律法解釈を民衆に押し付け、御言葉を人間の「重荷」としてしまう(あれもダメ、これもダメと、人が神に対してどうしたら罪を犯さないで生きられるかばかりを探っている。まことに消極的な生き方になります)。聖書の中に喜ばしい福音を見つけ出す助けをするのが聖職者の最大の務めであるはず。しかし、そこに義務だけを読み取るような教えは、むしろ苦痛をもたらすことになるでしょう。

本論 2. 偽善的行為

彼らのしていることはみな、人に見せるためです。経札の幅を広くしたり、衣のふさを長くしたりするのもそうです。(23:5)

主イエスは律法の教師たちの日頃の行動を取り上げ、その偽善を暴きます。「経札」とは 3cm~4.5cm ほどの「聖句を入れる小箱」(新改訳 2017) のことで、中には 4 つの聖句が入っていました(出 13:1-10、13:11-16、申命記 6:4-9、11:13-21)。ユダヤ人男性は(今でも)祈りの時にそれを額と左腕に結びつける習慣があります。なぜそんなことをするか。それは、そこに書かれている言葉を常に自分の身に付けていようという宗教的熱心を表すためです。最初は良い動機で始められたのでしょう。御言葉から離れまいとする素晴らしい姿勢です。しかし、それは次第に人に見られるための「敬虔な行為」へと変わっていきました。現在でも現地では同様の箱が販売されているようで、大中小三つの種類があり、大きいほど値段も上がるそうです。そういうことにお金をかけている人は、さぞかし信心深いのだろう。そういうイメージを与えるものだったのです。

「衣のふさ」というのは、祈りの時に用いられる肩掛けのようなもので、その縁に青い紐(房)が付いていました。主イエスご自身もそれを身につけておられたことが分かる記事もあります(9:20)。このような服装(長い衣)は、ラビが着るもので、一見して学者であることが人々に分かったのです。中には、より学者アピールをするために、あえて金ピカの房を付けたり、祈りの時間以外にもわざわざそれを着て歩き回る人もいたようです。「ラビよ」「父よ」と呼ばれることは学者にとっての誇りであり、尊敬されることに喜びを覚えたのであります。私も洗礼式、結婚式、お葬式の時にガウンを着ますが、そのような格好をしていると何となく普段の自分ではないような気がします。恐らく、列席者の方々にも「あの人が司式者に違いない」と分かる時だと思います。もし

私はその時に、少しでも自分が何か偉くなったような意識を持っていたとしたら、それはここで主が忌み嫌われる「ラビたちの心」になっているということでしょう。ガウンとは、あくまでも罪の身を覆い隠すものであって、権威づけの道具ではありません。

また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです。(23:6-7)

まず「宴会の上座」について。ユダヤでは宴会時にコの字型にテーブルが並べられたそうで、中に向いて左端が上座だったようです。宴会の主催者の隣あたりの席のことを言うのでしょうか。その席を陣取ろうとする輩を主イエスは冷笑しておられる。



また「会堂の上席」とは、ユダヤ会堂における会衆から見た正面の席のことで、律法の巻物に一番近く、最も目立つ場所でした。そういう席にいそいそと座りに行く人々がいた。これらはすべて、「ラビ」「教師」としての自分の立場をアピールするものと主の目に映ったのです。主はむしろ、自ら末席に就くことを求められる。

招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかって、末席に着かなければならないでしょう。招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになります。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(ルカ14:7-11)

まだ続きます。「広場でのあいさつ」とは、ラビに対する敬意の表現でした。宗教指導者には、誰の目にも分かるような敬意を伴う挨拶（深々と頭を下げることでしょうか）が求められていた。

「先生と呼ばれる」。当時、ラビは「私の大いなる方」「わが主」と呼ばれ、弟子は師に対して疑問を発することなく聞き従い、師の傍や前を歩くことができないほどに高い権威が認められていました。バカバカしく思われるかも知れませんが、これは現代でも違った形で現れる可能性があります。牧師が大きな権威・権力を持つと、教会はカルト化（狂信的崇拜）する危険性があるのです。教会の主が人間に置き換えられてしまう。主イエスの目にはイスラエル宗教の虚像が映っていました。

本論 3. キリスト者の教師・父・師

さて、8 節以下は「先生」「父」「師」という呼称の問題です。

しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。(23:8-10)

主イエスはご自分の弟子たちに、先生、父、師と呼ばれることの危険性を教えます。これらの呼称はすべて当時のラビたちが受けていたもの。そこには常に名誉、虚栄が隠れているからです。

日本語では「先生」も「師」もほぼ同じ意味で使われますが、原文では言葉が使い分けられています。「先生」(ῥαββί)とは(先ほども申しましたように)「わが偉大なるお方」という意味、「師」(καθηγητής)とは「導き手」「師匠」「主人」といった意味の言葉です。ニュアンスは違いますが、「父」も含めていずれも過剰な尊称であることに変わりはありません。英国では「Most Rev」とか「My Bishop」といった表現があるようです。いずれにせよ、主が言わんとしていることは、こういう呼ばれ方をするによって、本来崇められるべき神ではなく、人間に誉が移行し、そこに高ぶりが生じる危険性を避けよということです。

ただ、現代の教会では普通に牧師のことを「先生」と呼びますし、「牧師」という言葉には既に「師」という文字が入っています。現代の牧師は「先生」と呼ばれるべきではないのか。このことについては、この箇所だけで判断するのではなく、その他の新約聖書の聖句と照らし合わせながら判断する必要があるでしょう。主イエス以降の時代、教会では「教師」「父」と呼ばれる立場が確かにあったことが分かっています。幾つかの実例を挙げてみましょう。

- ・ たいあなたに、キリストにある養育係が一万人あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。(I コリント 4:15)
- ・ そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行う者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。(I コリント 12:28)
- ・ 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。(ヤコブ 3:1)

パウロは確かに、自分自身をコリント教会を生み出した父と呼び、教会内の役職を認め、ヤコブは教師の存在を前提として語っています。群のリーダーはいつの時代にもなくてはなりません。御言葉による導き手がいなければ、群は養われないからです。また、群に対して責任を持つ者がいなければ、まとまることは難しいでしょう。そして、群は自然にリーダーを立てるようになるはずなのです。

では、主が問題としておられるのは何か。それは、「先生」と呼ばれること、人から尊敬されること自体に喜びを覚えるようになることです。これは突き進むと、教会の主をキリストではなく自分とする危険性があるからです。牧師たる者は、自分も「兄弟姉妹」の一人に過ぎないという意識を忘れてはならないでしょう。牧師は祝祷の時に講壇に上がり、群を祝福します。これはあくまでも、キリストの代理として行なっている。ですから、私はすぐに講壇から降り、会衆の一人として主イエスの祝福を受けようとしています。あまりお伝えする機会はありませんが、私はそういう意識でいるのです。また、最近「あなたがた一同の上に」を「我ら一同と共に」と変えたのは、祝祷する自分も祝福を受けるべき一人だとすると、その表現の方がふさわしいと感じるようになったからです。

**あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。だ
れでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。(23:11-12)**

もはや説明の必要はないでしょう。20:26でも同じことが言われていました。私たちの主ご自身が最も低い者となられた。この方に従う私たちは、十字架まで下られた主イエスと同じ姿になることが求められているのです。

【結論】

牧師として生きることは、ある種の難しい立場を背負うことになります。それは、少なくとも三つの意識を同時的に持たなければならないからです。第一に、自分は主イエス・キリストを唯一の師とする皆様の兄弟であるということ。第二に、その兄弟姉妹の交わりの中から群のリーダーに立てられた者であるということ。第三に、様々な場面でキリストの代理として語り、祝福を宣言し、時に罪を示すという畏れ多い立場に立たされているということです。この立場を捉え違える時に高ぶりが生じます。自分がキリストの座、神の座にのし上がろうとする時、共同体は病んでいくのです。今日の箇所は、牧師だけに向けて語られているものではありません。私たち一人一人の心が問われています。私たちの内には高ぶりがないか。偽善はないか。へりくだって、主イエスの人格に一步でも近づきたいと思います。

【祈り】

教会の主、イエス・キリストの父なる神様。あなたは人の心を見ておられます。心は言葉に現れ、表情に現れ、行動に現れるものです。私たちが語り、行なっていることがすべて真実であることを願います。どうかすべてにおいて首尾一貫した生き方へと導き、イエス・キリストだけをわが人生の主、教会の主、世界の主として礼拝させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
皮相的な宗教にあらず、心の宗教を求め給う、父なる神の愛。
誰よりもへりくだり、御民の歩むべき道を示し給いし、主イエス・キリストの恵み。
互いに仕え、キリストにある生きた共同体を形成せしめ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。